

2018年12月18日掲載

「今年の漢字」

間もなく2018年が終わろうとしている。先日、今年の漢字に「災」が選ばれたが、皆さんにとって今年の漢字は何だろうか。

1年を振り返ると、平昌冬季五輪・パラリンピックをはじめ、大きなスポーツイベントが印象に残った。一方、「災」が象徴する通り、西日本の豪雨災害、道内では北海道胆振東部地震など災害が多い年でもあった。

私の今年の漢字は「子」だ。子どもたちに関する取り組みに関わるが多かったからだ。春休みにキッズ起業塾を開催したり、大型連休にPISA（国際学力調査）で常に上位に入るフィンランドに教育視察に行ったりした。9月からは、週に1回、小学生対象のキャリア教育スクールを開講し、さまざまなプログラムを通じて社会で必要な力を育むサポートをしている。

そのスクールに先月、台湾出身の方を講師に招いた。台湾には漢字の音に由来するマナーがあり、「傘」や「扇子」は贈り物にはタブーだという。中国語では「バラバラになる」「別れる」などの意味がある「散」と同じ発音になり、負のイメージを連想させるからだそうだ。

逆に「蝙蝠^{こうもり}」は、「福」と同じ音の漢字を使っていて縁起が良いとされている。日本でも「フクロウ」は「福老」などの字を当て、縁起物になっている。

さて、12月は「師走」。諸説あるが、お寺のお坊さんが忙しくなることから「師が馳^はせる」が由来だという。漢字に思いを寄せ、新年を迎えてみてはどうだろうか。

(毎日新聞より)

ダイバーシティ

女性

多様性

働き方

異文化

英語圏

ダイバーシティ (Diversity) とは、直訳すれば「多様性」となり、企業においてはダイバーシティ経営という言葉で使われます。

性別、人種、国籍、宗教、年齢、学歴、職歴など多様さを活かし、企業の競争力に繋げる経営上の取組のことを指します。

元々はアメリカで始まったダイバーシティ経営。
女性やマイノリティの積極的な採用や、差別のない処遇を実現するために広がった取組です。

日本においては、人種、宗教等の多様性ではなく、性別や、ワークスタイル、障害者採用などで使われることが多い傾向がありますが、取組を進める企業が増加しています。